
穴《アビス》があるけど入りたくない

風来坊Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

^{アビス}穴があるけど入りたくない

【Nコード】

N7630V

【作者名】

風来坊Q

【あらすじ】

誤って上官の足を撃ち抜いてしまった陸軍の新米兵士、レイ・アオイはその罰として十数年前からアメリカの中央に存在する巨大な『穴』に転属される事となる。金と暴力が支配するその無法地帯で突如出会った美人少佐の気まぐれにより、レイは僅か四人しかない彼女の部隊に配属される事となった。綺麗なお姉さん・筋肉バカ・無口少女・狙撃が嫌いなスナイパー……そして新たに平凡な日系アメリカ人で構成された奇妙な部隊。その名も核家族^{ニューヨーク・ファミリー}

00 穴に落ちた東洋人（アジア人）

ヘリコプターは深く深く下りていく。レイの気持ちはすでにどん底だったが。

注意が欠けていたと言うべきか、運が悪いと言うべきなのか。

数ヶ月前、戦闘車両の格納庫でレイ・アオイ二等兵は銃の整備を行っていた。もちろん、彼は安全の為にマガジンは取り外したが、ブートキャンプを出たばかりの新人だった故にセイフティーを^{チェンバー}を忘れ、おまけに薬室には弾が入ったままだった。

そして銃は見事に暴発してしまい、たまたま通りかかった上官の足を貫通すると言う悲惨な結果を起す。

事故だったとしても罪は重く、レイは不名誉除隊プラス嚴重な罰を受ける事を覚悟していた。事故として認められなかったら^{チェンバー}反逆罪で極刑さえありうる。

だが、レイに下された判決はそれ以上に厳しいものだった。

^{アリス}地獄に行けと。

そしてヘリコプターは下り続ける。レイを果てしない闇へと誘うように。

01 穴の中では豚が神様

十数年前、アメリカには巨大な「穴」が出来た。

突然起った謎の地盤沈下により東西はカリフォルニア州からインディアナ州の間、南北はメキシコからノースダコタ州の間が丸を描くように残りの大陸から六キロほど沈んでしまった。

そこに住んでいた者達も当然の如く沈んで行き、ヘリコプターなくしては出る事すら出来なくなった。

つまり、一億人近くの間人がアビスと呼ばれるその穴の底で暮らしている。

混乱に対応する為に中央政府はどんどん強くなったものの、それは新たな官僚主義を生んだに過ぎず、今やアメリカは合衆国とは名ばかりの腐りきった政府と化していた。

臆病者と言う名の平和主義であるレイが軍に入らざる終えなかったのも再開されてしまった徴兵制度故にである。

そして今は誰もが恐れるアビス行きとなった。

後悔と嘆きを心の中で巡らせているうちにも、ヘリコプターは着々とヘリパッドに近づき始める。

そこはテキサス州にある陸軍の基地、フォートフッド。

レイは他の地獄送りになった兵士達と共にヘリコプターから降りると、一列になってヘリパッドを渡って落書きだらけの大きな国旗が飾られた建物を目指して歩く。

共に下りてきた数機のヘリコプターもそれぞれ着地し、中から兵士たちを送り出し始めた。どれもまるで戦争もののハリウッド映画で見かける強面でガタイ連中ばかり。レイは何かと恐怖を感じざる終えなかった。

目を合わせたら殺される事を恐れてレイは空を見上げると、そこには太陽が光っている。

レイは穴の底なので当然暗いのだろうと思っていたが、穴があま

りにも広いせいも意外とそうでもなく、地上の昼間と変わらない明るさであった。心の高鳴りが留まらない彼にとって永遠の闇に閉ざされなくて済んだほんの少しの心休めになったかもしれない。

暴発事件の後、レイの処分は『第961歩兵旅団に転属』と言う事になった。

アメリカ陸軍第1軍所属の第961歩兵旅団はアビスの出現と共に急遽編成された旅団戦闘団である。管轄はアビス全域に及び、警察を持たないアビスにとって唯一の法の守護者と言っても良い。

最もアビスの危険性により死亡率は他のどこと比べもてずば抜けて高く、一度言ったら帰れないと言うまさに地獄そのもの。つまり自ら志願するものは殆どおらず、九割以上が他の配置で何かをやらした問題児で構成されている。

自分の運命を恐れながら歩いていると、レイはガタイ男達と共にあつと言う間に建物に辿り着いた。

建物に入るとそこは巨大なホールであり、目の前には何人かの上官が立っていた。その中心には肥満体の中年男性がパイプ椅子にさばりながらポテトチップスをだらしなく食べていた。

肥満体の男性はポテチを噛みながら隣に立っている仕官に喋る。

口を開く度にポテチの破片が飛び出し、いささか気持ち悪い。

「ざつと百二十人か。大した収穫じゃないな、こっちに回ってくる新鮮な血がどんどん少なくなってきたるように思えるのは俺だけか？ じゃ」

隣に立っていた上官は頷くと、四列に並んだ兵士達を睨み、叫ぶ。

「気を付け（At Attention）！」

レイは他の兵と共に一斉に両足の踵を付け、背筋を伸ばし、顎を高くする。

すると、肥満体の上官はダルそうにゆっくりと立ち上がり、やたらうるさい屁をこいてから適当な敬礼をする。

今や政府にとってアビスは必要なくなったものを捨てる大きなゴ

三箱同然。

そしてそのゴミ箱に配置された第962歩兵旅団の管理体制はゴミ同然にグチャグチャ、とレイは聞いていたがそれほど酷いものなのだろうか。

「俺は第961歩兵旅団を仕切る、つまりアビスの全軍を仕切ってるストラット大佐だ。ここで一番偉いつて訳だ」

ストラット大佐はポテチの袋を放り捨て、こちらに向かって歩いてきた。

「どのくらい偉いかと言うと、神様に近いな」

どうやらこの人はかなり権力が頭にきているようだ。

「実際、この穴から自由に出入り出来るのは俺だけ。そしてお前らをここから出してやれるのも俺だけだ」

大佐は汚らしい声でガハハと笑う。

アビスに住まう者は軍の許可無くしては出る事が出来ない。私用のヘリコプターやジェット機を持っていた人間もいたものの、アビスの周辺は軍が完全に方位しているので自力での脱出は不可能である。

アビスの人が声を上げてても政府には聞こえない。政府にとってそれは気にしなくて良いと言う意味であり、このような男にアビスの管理を任せても何の問題もないと言う事になる。

とは言えアビスでは何度も司令官の座を狙ってクーデターが頻繁に起こり、今や司令官の仕事はクーデターで排除される前に出来るだけ市民から金を盗んで地上へと逃げる1960年代の南ベトナムも顔負けの回転ドア方式のシステムになりあがっている。

「お前ら地上では地獄を免れる為に毎週日曜日に教会行ってたかもしれないけどなあ、もう必要ないぞ。すでに地獄にきちまったんだからな。俺の前に跪けば苦しすぎる思いはしなくて済む訳だ。いい話じゃねえか」

ストラット大佐は並ぶ兵士達を見つめながら唾を吐いた。

「もつとも、てめえらが教会に行くような連中じゃないって事は分かってるんだけどな。きちんとガキん時にサンデースクールで十戒

を学んでたらこんな所に来るわけねえもんな」

大佐は自身の後に並ぶ上官達に振り返り、まるでパーティーが始まるかのように両手を上げる。

「それじゃあ、諸君。好きな奴らを選べ」

上官達は次々と屈強そうな兵士から指名し、自らの前に並ばせた。アビスの軍はこうやって誰がどこに所属するかを決めているようだ。

まるで小学生がキックボールのチームを選んでもみたいじゃないか。

この状況はレイの記憶から嫌なものを呼び覚ました。

小学生の頃キックボールをやる度にレイは先生の命令でしぶしぶ仲間に入れられた自閉症のトミー君と共に最後まで選ばれなかった。それから両側のキャプテンが最後まで「いらねえよ」と譲り合っ

てからお互いレイとトミー君を泣く泣くチームに受け入れた。

不運な事にも小学生の頃の悪夢は再び舞い戻る事となる。他の兵士達が全て選ばれた後、レイはたった一人広いホールの中で突っ立っていた。

仕方も無い、とレイは思う。

この中で見るからに弱そうなのはレイだけであった。別に極端に痩せてる訳ではないが、少なくとも他の連中とちがってマツチヨには見えず、背丈も5フィート8インチ（172センチメートル）程度。18歳の東洋人としては平均だろうが他が6フィート越しばかりの中ではとんだチビとしか言いようがない。

レイはふと自閉症のトミー君が羨ましくなった。知的障害者の彼は徴兵制度の対象外である故に。

「誰もこの東洋人アシアンはいらねえのか?！」

ストラット大佐は一人取り残された俺を見つめてから回りの上官に怒鳴り声で尋ねる。返事は無し。

「しかたねえな、後片付けがめんどくさくなるけど」

大佐は溜息を付くと、腰元のホルスターに掛かっている拳銃を抜く。

あ、あれ……何でそんな物を抜くのかな？

着地してからずつと続いていた心臓の高鳴りはさらに増す。レイは息が苦しくなった。

「おい、東洋人。名前はなんだ？」

完璧に近い角度で大佐に敬礼をすると、肺に残った僅かな空気を振り絞り、レイはなるべく勇ましく低い声で言う。

「れ、レイ・アオイ二等兵でありますう！」

……出てきたのはいつもより甲高く、小動物の命乞いにしか聞こえないような情けない声だった。

「そうか」

舌打ちをし、レイに拳銃を向ける大佐。

「残念ながらお荷物はいらさないな」

外見だけでそれはあんまりじゃないか、とレイは心の中で叫ぶ。

彼は救いを求めて辺りを見回すが、他の兵士は全く興味を示さな
いか、おもしろ半分死に直面した情けない東洋人の姿を見つめ、
ニヤついていた。

僕の命はそんなに軽いものなんだ。くそっ……

あまりの悔しさにレイの目には涙が溢れてくる。それを見たスト
ラット大佐は笑い出し、レイの胸倉を叩きながら言う。

「おいおい、泣いちゃってよ。ママがオツパイが恋しくなったか？
残念。ここにいる連中の乳首は岩の如く硬いぞ」

周りにいた兵士達は一斉に笑い出す。その中でスキンヘッドの白
人兵士がストラット大佐に言う。

「アンタのオツパイはそこいらの女よりでかくて柔らかさそうだけど
な！」

笑いは爆笑へと変わった。確かにストラット大佐は引き締まった
体つきからは程と遠い肉体である。

ストラット大佐は頭に血筋が走っていた。よほど肥満体の事を気
にしていたらしい。

その途端、銃声が轟き笑いが一瞬にして止まった。

レイは自分が撃たれたのかと体中を見回すが、痛みも傷跡もない。ストラット大佐の拳銃はレイの左へと向いており、その先には頭に風穴を開けられて倒れたスキンヘッドの兵士が。

「使い捨て（キャノンフオダー）の分際で一言余計だ」

大佐はそう吐き捨てると、両側で啞然となっている二人の兵士に銃を向ける。

「とつととその死体を捨てて来い」

急に臆病風に拭かれた二人の兵士達は強面に似合わぬ真つ青な顔でスキンヘッドの死体を引きずっていく。

「少し邪魔が入っちまったが……それじゃあ、レイなんとか一等兵は敵前逃亡かなんかによる不名誉の戦死を遂げたって事にするか」
名誉の戦死すら与えてくれない心の狭さにレイは目に溜まった涙が零れそうになった。

大佐の指が拳銃のトリガーをゆっくりと抑える。

レイは自らの愚かさを悔やみ、あつけない終わりを悲しみ、心中で家族や友人に別れを告げていると、再びホールに大きな音が轟いた。

ところがそれはレイが予想していた銃声ではなく、彼の真後ろにあるドアが乱暴に開けられる音だった。

それに反応するように大佐は拳銃を下ろし、舌打ちをした。

「あら、私に会うのが嬉しくないのかしら、大佐」

それは女性の声だった。レイは思わず振り返り、扉の方を見つめる。

そこに立っていたのは軍服を着た黒髪の若い女性。

スタイルは良く、かなりの美貌の持ち主であり、他の連中も彼女を見て静まりかえった。

自称神様の何様を黙らせる彼女は本物の女神様に違えない、と言っ
う考えがレイの思考を過った。

するとストラット大佐は舌打ちをし、拳銃を下ろす。

「何の用だ、フォーレ少佐」

どうやら彼女は少佐らしい。ストラット大佐より階級は低い物の、彼にも一目置かれてる存在のようだ。

フォーレ少佐と言う名の美女は胸辺りまで届くロングヘアを揺らしながらホールに入ってくると、辺りを見回しながら言う。

「お姉さんも久しぶりに新人の取り合いに参加しようと思ったんだけど、どうやら少し遅れちゃったみたいね。まっ、また似たような顔ぶれだけど」

「ああ、残ったのはこのヘナチヨコ東洋人だけだ。役に立ちそうも無いから始末しようと思ってな」

「へえ」

するとフォーレ少佐はレイの前に立つ。身長はレイより二、三センチ高いだけだが、足はそれよりはるかに長いような気がした。

少佐は両手を腰にあてると彼の顔をジロジロと見つめる。

「結構可愛いじゃない……次男か三男辺りね」

長男ですが、と思ったのののあまりにも近い女神の顔に呆気に取られ、レイは息すらままなかった。

ストラット大佐は唾を吐きながらフォーレ少佐に言う。

「ケツの穴は足りてるんだ。そう言う趣味の奴は少ないからな」

するとフォーレ少佐はレイの背中をポンツ、と叩き、大佐に宣言した。

「じゃあ私が貰うわ」

「けっ、好きにしる」

ストラット大佐は拳銃をホルスターに戻すと、再びパイプ椅子に戻って座る。

「じゃあ、行きましょっか」

レイはフォーレ少佐の言葉が自分に向けられている事に気付いた。

こんな地獄の中でも僕に救いの手を差し伸べる本当に女神かもしれない。

自分の考えが何かとオーバーだと言う事は分かっていたが、それでも今までこれほどの絶望に直面した事が無かったレイはそれほど

の感動を心で感じるしかなかった。

「どうしたの？ 来るんでしょ」

少佐の雅な後姿に釘付けになっていたレイは振り返る彼女の言葉と共に何とか自分の意識を引き戻す。

「は、はいっ！」

レイは敬礼すると、急いで美しき上官の後を追った。

02 穴の中で交わる鉛と拳

基地の駐車場まで歩くと、フォーレ少佐は近くに止まっていたポロ口のジープに乗り込み、助手席の埃を軽く叩いた。

「さっ、乗って」

「はいっ」

硬い動作で乗り込むレイを見つめながらフォーレ少佐はクスツと笑った。

「そんな力まなくてもいいのよ」

「はい……」

レイは助手席に座り、シートベルトをしようとした瞬間、ジープは突然走り出す。

「で、君の名前はなんなの？」

必死にシートベルトを見つけようとしながら僕は答えた。

「レイ・アオイ二等兵です」

やっとシートベルトをしめる事に成功した僕は姿勢良く座る。

「そっか。名前からして中国人……じゃなくて日本人かな？」
チャイニーズ ジャパニーズ

「はい、所謂日系二世です」

レイの両親は二人とも日本育ちの日本人だったが、父親が仕事でアメリカに転勤し、住み着いた為、レイは生まれも育ちもアメリカである。

中学生の頃までは毎年のように日本の家族に会いに行っていた上、家庭では両親が日本語を使うように心がけ、おまけにネットですょつちゅう日本のアニメを見てたが為に日本語はそれなりに話せる。読み書きはもつてのほかだが。

『レイ』と言う名前も親が「日本語でも英語でも使える名前」と言う事でしたらしい。英語だと『Ray Aoi』で日本語だと『青井伶』。

暴風と割れたアスファルトから巻き上げられる砂埃が顔にぶつか

る中、レイは自分の事情を色々と少佐に説明すると、彼女は面白そうに聞きながら尋ねる。

「じゃあさ、やっぱりカラテとかやる？」

アメリカ人お得意のステレオタイプینگが発動した。レイは何度その質問を聞かれたか覚えていないほどである。

「まあ、似たような……琉球古武道をやってみました」

教えを広める為に何十年前も前に渡米したとある武道家の道場が近くにあったので伝統的な事をやりながら体を鍛えると言う理由で父親に入れられ、気付いたころには二段の資格を受容していた。

「リューキューコブドー？ 何か強そうな名前ね」

もつとも、レイ本人はケンカなどした事もないので自分が強いかどうかははっきりとは分からないが。

レイは琉球古武術について軽くフォーレ少佐に説明した。

「そつか……面白そうね。あつ、そうだ。これからレイ君は曹長ね」

「はっ？」

突然の昇格にレイは驚きを隠せなかった。

「うれしくないの？」

まるでレイが飛び上がって大喜びする事を予想していたのか、少佐はレイの反応を見てキョトンとしていた。

「い、いいえ、ありがとうございます……いたつ、何か目に入った」

とは言え、そんなに簡単に人を昇格してもいいのかな？

レイはアビスに来て以来、ありとあらゆる常識が吹っ飛んでいつている気がしていたが、もはや満更でもないだろう。

「私はフレッセ・フォーレ少佐。フレッセお姉さんって呼んで良いわよ。ちなみに名前はフランス語。フランスの事なんて全然知らないけどね」

呼びたいと思う心が無かったわけではなかった。しかし、上官をお姉さん呼ばわりはまずいだろうと思いい、レイは自重した。

フォーレ少佐は通り地平線を眺めながら喋り続ける。

「でも、そこがアメリカの良いところよね。フランス人だろうが日

本人だろうがここに住んでればアメリカ人だから。色んな所から来る人が全部混ざってゴツチャゴツチャのグツチャグチャになってさ、楽しいじゃん」

そしてその『ゴツチャゴツチャのグツチャグチャ』が吐き出した汚物がこの穴に溜まる。少なくともここは全然良いところではないとレイは確信していた。

「まっ、ここ（アビス）は人を選ぶかもしれないけど」

人を選ぶってレベルじゃありませんよ、とレイは心の中でつつこむと、隣に座る柔らかな表情の美人に尋ねた。

「あの、フォーレ少佐……」

少佐はその言葉に反応するようにため息を吐き、肩を落とす。

「結局呼んでくれないのね、お姉さんへこんじゃう」

美人を凹ませるとは男として最低かもしれないが、それでもレイは自分が一人の兵士だと言う確信は捨てたくなかった。地上での敵しすぎる軍による秩序も今では懐かしく、恋しい。

「申し訳ありません」

すると、少佐はレイの背中を叩いた。

「冗談よ。あんまり硬いと長生きできないぞっ」

少佐はレイに可愛げな笑顔を向ける。それはあまりにも眩しかった。

「でも、あの豚野郎もひどいわね。こんなに真面目な子を殺そうとするなんて。間に合って良かったわ、運命って奇妙なもの」

レイはとりあえず頷いた。その間にも彼と少佐を乗せたジープは猛スピードでフォートフッドを離れ、隣にあるクリーンの街を抜けていく。

地盤沈下以前は栄えていたのだろうが、今のそこはひたすら荒れ果てていた。

「ひと気がないですね……」

太陽が明るく照らされる中、レイがそう呟くと、少佐はハンドルから目を離さずに喋り始める。

「穴が出来たばかりの頃は少しは機能してたらしいけど、政府に見捨てられたと気付いて暴動が何度も起こった拳句、今はどの街もこんな感じよ。野党が怖いからね、大体の人間は軍の拠点がある周辺に密着して住み着くか、資源がある所に密着して自警団みたいなものを作って暮らすのが……あつ、噂をすれば鬼みたいね、悪いけど後部座席にあるM4を二丁取ってくれる？」

「えっ、は、はあ」

レイは振り返り、後部座席に置いてあるアサルトライフルを手に取りった。

M4カービン。アメリカ陸軍で多用されているアサルトライフルである。そのコンパクトなボディは市街戦で役立ち、レーザーサイトやグレネードランチャーなどのアクセサリも豊富なので、汎用性が高い。この二丁は射撃を安定させる為のフォアグリップがついていた。

ただ、レイ自身M4で上官の足を撃ち抜いてしまったので少々トラウマではあったが。

「片方はレイくんによ、準備してね」

「準備？」

するとフォーレ少佐は急にジープを止め、前方を指差す。

「野党よ」

その先には世界的に有名な安くて安心のアサルトライフル、AK47を持った人相の悪い半裸の男性が四人ほど立っている。

向こうもこちらに気付いたようで、AKを構え、発砲を開始した。

えっ、これってもしかして銃撃戦？

「伏せて！」

レイが自分のいる状況をイマイチ飲み込めず突っ立っていたところをフォーレ少佐は押さえつけ、頭上を目掛けて飛んでくる銃弾から救った。

ジープの影に隠れて敵の攻撃をやり過ごす中、フォーレ大差はレイに笑顔で尋ねた。

「軍つてアビスじゃ結構嫌われてるのよ、知ってた？ 彼らがここから出れない理由が私達だからね、そりゃそうか。こっちはハイテクな武器やいい素材で出来た服を持つてる訳だから奴らにとっちゃ剥いたら得だし」

いや、知つて何もありませんよ！ カオスですよこれカオス！ 見られた瞬間攻撃されるなんて秩序の欠片も無いじゃないですか！

……などと、言いたい事は色々あったが、結局レイは空しく口をパクパクさせながら彼女をボーっと見つめるザマになってしまった。

「まあこう言う所なのよ、アビスは。スリル満点でしょ」

フォーレ少佐は可愛らしくウインクすると、腰元の手榴弾を取り、安全ピンを抜いてから数秒後、ジーブ越しに投げる。

「距離にもよるけど手榴弾は安全レバーを手放して二秒間ぐらい待った後に投げるのがオススメよ」

手榴弾の爆発が鼓膜を劈く中、激しく震えるレイを見つめながらエバンズ少佐は尋ねる。

「もしかして実戦は初めて？」

「は、はい」

するとフォーレ少佐は驚いた顔し、それからそんな彼を哀れむような優しい目で見つめた。

「そりゃ怖いはずね」

気付くと、少佐の手はレイの顔を掴み、柔らかい胸元へと押し込んでいた。

「あ、あの……少佐？」

レイは自分の状況をさらに飲み込めなくなった。このような場所でこのような温もりを感じているとは、何が違和感があった。

「大丈夫、お姉さんが護つてあげるから」

いや、そんな事より戦いの真っ最中でこんな事してて……でも柔らかいし、いい匂いがするし……何だかどうでもよくなってき

た。

「でも、男の子なら少しは強く振舞わなきゃ駄目よ」

エバンズ少佐はレイを離すと、M4を構え、反撃を開始した。

惨めだった。女性に護られるなんて、男としてはずかしすぎる。

自分でも気付く前にレイは手に持ったM4のセイフティーを外しており、ジープから上半身を見せた。

向こうはエバンズ少佐の威嚇射撃によって建物の瓦礫の後に隠れている模様。

「だけど、顔は上げるはず。」

レイはアイアンサイトを覗きながら敵が身を隠した瓦礫を見つけ、狙いを定める。

心臓の鼓動が止まらず、息苦しい。最悪の気分だった。

そして敵はついに頭を上げる。

「食らえ！」

思わずレイはそう叫び、構えたM4の引き金に指を掛ける。

次の瞬間、敵の喉下に穴が開き、彼は血を噴出しながら倒れた。

だが、レイはまだ撃つてもいない。

彼は戸惑いを隠せずに隣にいるフォーレ少佐を見つめた。

「残念、レイ君が遅いから私が始末しちゃった」

テヘッ、と言わんばかりの表情で少佐はレイに言う。

その間にももう三人の野党は近くの建物に駆け込んで言った。

「あの中が本拠なのかしら」

すると一回の窓から一人の野党が大きな筒のような物を担いで姿を現した。

「あれは……」

野党が持っているのは紛れも無くロケットランチャー。レイは再び恐怖で体が固まってしまった。

「避けて！」

フォーレ少佐の言葉と共にレイは右側に飛び、受身を取った。

ロケットランチャーから発せられた弾は見事にジープを粉々に砕

き、炎と煙が空高く舞い上がる。

「一体……どうなって……」

レイは爆発のショックで思考が回転していた。今だに自分が直面している現実が信じられない。

上官に撃たれそうになって、美人な少佐に救って貰ったと思っただけならいきなり曹長になってそのまま実戦突入でロケットランチャーをぶっ放されて……

だが、回転が収まった頃には一つだけ理解した。戦わなければ死んでしまうと言う事を。

レイは敵の射撃から逃れる為に一直線で近くの瓦礫に向かって走ると、その影に飛び込む。

その間にもフォーレ少佐はレイに気を取られていた二人の野党を始末したようであり、残りはロケットランチャーを持って一人となった。

これなら楽勝……とレイがほっと胸を撫で下ろした時、最後の野党はどこからともなく取り出した汎用機関銃を窓ふちに載せ、少佐に向かって撃ち始める。

重い銃声の中、瓦礫の影に隠れていたレイは自分の状況を確認する。

フォーレ少佐は機関銃の容赦なき連射に押さえつけられ、隠れている壁の後から身動きが取れない。

ただ、敵の意識は彼女に集中されている。

レイは覚悟を決めると、機関銃の死角である方向から建物に向かって走る。

建物の入口に身を潜め、数メートル先に相変わらず機関銃を乱射している野党を確認。

M4をゆつくりと構え、アイアンサイトを覗く。そこには敵の頭上。

レイは大きく息を吸うと、引き金に巻いた左手の人差し指を思いっきり押さえる。

耳元の爆音と共にレイのアサルトライフルから何発もの銃弾が繰り出される。

しかし締め付ける力が弱かったのか、反動でM4の銃身は大きく飛び上がり、野党の真上の天井にいくつもの穴を開けるのみの結果となった。

野党はレイの存在に気付き、彼に機関銃を向ける。

平常心を完全に失ってしまったレイは思いつきM4を敵に投げつけた。

こちらは見事に野党の顔面に命中し、衝撃で銃身がぶれた為敵が機関銃から放った弾丸はあさつての方向へと飛んでいく。

「銃が駄目でも……僕にはこれが！」

その隙を狙ってレイは野党に急接近すると、スライディングして自分よりは二周り大きい野党の膝を両足で挟み込み、前方に倒した。柔道で言う所の蟹挟である。

突然の攻撃に敵は受身を取る暇もなく思いつき地面に叩きつけられた。

レイは起き上がるとそのまま彼の上を取ろうとしたが、筋肉の塊である野党は思ったより早く起き上がり、鼻息の荒く恐ろしい顔をしながら機関銃のストック部分で彼に殴りかかる。

「ためええええ！」

すでに両足を肩幅まで開き、腰を落として戦闘態勢に入っていたレイは敵の攻撃を潜るように避けると、気合と共に腰の捻りをこめて左拳を思いつき野党の腹に叩き込む。

そして怯んだ野党の腕を掴むと足を払って地面に叩きつけ、今度は倒れた敵の顔面に正拳突き。

「エエイツ！」

何かが砕ける音と共に、野党は鼻から大量の血を噴き出し、動かなくなった。

「勝った……の？」

敵は完全に気絶しているようだ。

レイは返り血のついた自分の拳を見つめながら息を落ち着かせようとする。

こんな戦いに巻き込まれた事自体が信じがたかったが、これはさらに夢だとしか思えない。

倒れた巨漢に目を向け、レイはふと父親に教わった日本のことわざを思い出す。

「窮鼠猫を囓む……こう言う事なのかな？」

体が急に重くなった。彼を駆り立てていたアドレナリンが効力を失ったに違えない。

「つかれた……」

「大丈夫?! レイ君」

振り向くと、こちらに向かってフォーレ少佐が走ってきていた。

彼女の心配の声は何とも聞き心地が良い。

フォーレは鼻血を流しながら倒れている野党を見つめながら驚いた顔をした。

「すっごい、素手でやっちゃったの？」

「はい、一応」

すると再びフォーレ少佐の腕がレイの体を取り囲む。

「やれば出来るじゃない！」

気が付くとレイは再び彼女に抱きしめられていた。

「さすが私の見込んだだけの事はあったわ。そのリユーなんとかは伊達じゃないわね、立派だぞっ」

優しい声でそう語りかけられた。顔を彼女の胸に埋められたまま頭を撫でられるうちに、柔らかさと香ばしい香りによってレイは眠気にそそられ始める。

「ちよつと……休みます」

「えっ、あれっ、レイ君？」

レイの視界は真っ白になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7630v/>

穴《アビス》があるけど入りたくない

2011年8月15日03時32分発行